2020.2.7
第171号

発行
福島県市町村教育委員会連絡協議会
北会津支会
耶麻支会
両沼支会

編集
福島県教育庁会津教育事務所

編集協力
小・中学校長会

会津人の教え

会津教育事務所域内三支会連絡会
会長 林 健幸

一昨年、会津では戊辰百五十年の各種の式典、催事が行われ、会津の幕末の歴史に思いを寄せる機会が多々ありました。本年は青森県むつ市に先人が会津から斗南へ入封され、田名部圓通寺に斗南藩庁を置いて藩政を敷いてから百五十年になります。五年前、斗南藩立藩百四十五年記念式典が催され、参加してきた際にいただいた記念誌より抜粋し紹介します。

「会津人の男子は、会津での少年時代から青年時代にかけて藩校日新館で文武の教育を受け、俊才は、江戸にあった幕府直属の昌平黌の留学を許可された。女子もまた武士社会での家庭教育の範囲内で読み書き、礼儀作法、裁縫や料理の家事のみならず薙刀、弓道を身に付けた。～中略～旧斗南領では会津人の残留者が多かった県南部地区の公立小学校においては、圧倒的に会津人の血を引く教員が多かった。～中略～会津人の血を引く教員が南部地方のみならず、津軽地方の教壇にも立つようになっていった。このような傾向が明治の末年まで続いた事もあって、会津士魂の伝播とまではいかないにしても、特に、南部地方・下北地方にあっては、会津人の教員を通して彼らの気風の一端が地域社会に浸透したことだけは認めてよい。」（斗南会津会記念誌・先人斗南に生きるより）

最近よく会津のＤＮＡという言葉を耳にしますが、（私だけかな？）全国共通の教育のほかに、日本各地にその地その地の地域教学があります。戊辰戦争で敗れた先人たちが、会津人としてのアイデンティティーを保つ根幹をなしたのは、藩校日新館で学んできた文武であり、家庭教育だったと思います。江戸時代より培われた教育への思いが戊辰後辺境の地へ流された我々の先人たちがよって立つところです。その思いはいまでも流れているもので、斗南だけではなく、日本各地に移り住んだ会津人たちの共通の思いでもあったかと感じます。今、あらためて先人に感謝し、この伝統を伝えていかなければの感を強くしています。

各種受賞紹介（敬称略）

□文部科学大臣表彰
○令和元年度教育者表彰
喜多方市立第一小学校　校長　佐川　正人
会津若松市立第三中学校　校長　歌川　哲由
○キャリア教育優良校表彰
喜多方市教育委員会
会津美里町立本郷中学校
○学校給食表彰(共同調理場)
会津若松学校給食センター
○「地域学校協働活動」推進に係る表彰
湊地区地域学校協働本部（会津若松市）
○優良ＰＴＡ表彰
さくら幼稚園保護者会
猪苗代小学校父母と教師の会
○優良公民館表彰
会津若松市生涯学習総合センター
○「家庭教育支援チーム」の活動の推進に係る表彰
喜多方市家庭教育支援チーム　“もも”
○優秀教職員
喜多方市立塩川小学校　教諭　五ノ井達也
会津坂下町立坂下中学校　教諭　橋谷田　亨

□県教育委員会表彰
○地方教育行政功労者
前昭和村教育委員会教育長　本名　幸平
○学校教育功労者
喜多方市立第一小学校　校長　佐川　正人
会津若松市立第三中学校　校長　歌川　哲由
会津若松市立第四中学校　校長　菊地　裕二
○社会教育功労者
前北会津地区社会教育委員連絡協議会会長　森　武久
○社会教育功労施設
会津若松市湊公民館
○へき地教育関係功績者
柳津町立会津柳津学園中学校　校長　髙橋　弘悦
○へき地教育功績顕著な団体
会津若松市立湊中学校
○優秀教職員
喜多方市立第一小学校　教諭　伊藤　大
喜多方市立松山小学校　教諭　岩本美和子
磐梯町立磐梯中学校　教諭　石井千加子
福島県立会津学鳳高等学校　教諭　丸山　弘樹
福島県立会津農林高等学校　教諭　矢澤　郁代
○福島県教職員研究論文
特　選　喜多方市立第二中学校
奨励賞　喜多方市立塩川小学校

□県学校関係緑化コンクール
《学校林等活動の部》
○知事賞・福島民報社社長賞
会津若松市立湊小学校
○関東森林管理局長賞
会津若松市立川南小学校
《学校環境緑化の部》
○知事賞・福島民友新聞社社長賞
磐梯町立磐梯第一小学校
○教育長賞
会津若松市立大戸小学校
○公益社団法人福島県森林・林業・緑化協会会長賞
会津若松市立川南小学校
○福島県学校緑化推進委員会会長賞
会津若松市立湊小学校

□県学校歯科保健優良校表彰
○優秀賞
会津若松市立河東学園小学校
会津若松市立大戸小学校
磐梯町立磐梯第二小学校
喜多方市立第一小学校
喜多方市立上三宮小学校
喜多方市立関柴小学校
湯川村立勝常小学校
○努力賞
磐梯町立磐梯第一小学校
喜多方市立松山小学校
喜多方市立熊倉小学校
喜多方市立高郷小学校
磐梯町立磐梯中学校
福島県立坂下高等学校
○奨励賞
北塩原村立裏磐梯小学校
会津美里町立高田中学校
○優秀活動奨励賞
喜多方市立姥堂小学校

□県学校給食会優良団体・功績者表彰
○優良団体
会津若松市立行仁小学校
○功労者
会津若松市立永和小学校
主任栄養技師　五十嵐朋子

□ふくしまっ子ごはんコンテスト（学校賞）
会津若松市立一箕小学校
会津若松市立大戸小学校
会津若松市立湊中学校
会津美里町立新鶴中学校

各学校の特色ある取組紹介　会津若松市立城西小学校

考えて話そうとする外国語活動の授業づくり

本校は，「ふくしま外国語推進リーダー（専科指導教員）」が配置されており，県教委主管「英語指導力向上事業」の研修協力校指定を受け，担任，ＡＬＴ，近隣中・高校と連携を図っています。

今年度は標題をテーマに，教科化への円滑な移行に向けた研究実践を進めてきました。以下に，研究内容と実際，課題等の概要をご紹介します。

研究内容１

○実態に合った目的のある言語活動（単元づくり）

特に高学年では，言語活動に必然性をもたせ，単元のゴールとして位置付けるために，国語科や行事，地域素材等と関連付けた単元目標を設定しました。時期を合わせたり，関心がもてる話材を絡ませたりすることで，興味や意欲をもって学習に取り組む姿が増えてきました。

日常生活で使用する場面の少ない「外国語」の学習であることを考慮しながら，個々の実態を踏まえつつ学級全体の実態にも配慮した言語活動の実践を心がけていくことが課題です。

研究内容２

○指導と評価に役立つＣＡＮ－ＤＯリストの活用

短期的には，毎時間めあての確認とまとめの時間を確保し，何ができるようになったかを児童と共有しています。長期的には，４月の授業開きで，１年間の学習内容を示したカードを使い，身に付けていく力を確認し，年度末には１年間の振り返りとしても活用します。

今後は，日常的に可能な評価方法（パフォーマンステストを含む）を模索していきます。

慣れない外国語の指導であり，教科化の１年目を迎えるということで不安な思いはあります。しかし，他教科と同様に，教科としての目標や系統性，他教科との関連，中学校との連携，「基盤は学級経営」等を大切にしながら学校全体で研究実践を積み重ねていきたいと考えています。

各学校の特色ある取組紹介　喜多方市立高郷小学校

子どもと共に楽しむ「外国語教育」

令和２年度，小学校では学習指導要領の改訂に伴って外国語科の授業を年間７０時間行うことになります。そして，本校では授業時数の半分はＡＬＴが入らず担任が一人で行い，「担任が自信をもって進める授業づくり」を目指しています。

教師が確実に英語の指導力を身に付け，各担任が自信をもって授業を行うことが求められております。本校では，現職教育の研究主題を「伝え合う喜びを実感する児童を育てる小学校外国語教育のあり方」として授業づくりに取り組んでいます。そして，子どもたちが，外国語を話すことの楽しさを実感するには，まず，教える側の教師自身が英語を使っての会話を楽しまなければならないと考え，「たどたどしくてもいい。まずは，教師が話そう。」とスタートしました。

そこで小中連携の一環として高郷中学校から英語科の教諭に週に1回JTE（Japanese Teacher of English）として来ていただきT・Tの授業を取り入れています。

当初は，ＡＬＴやＪＴＥと会話することに不安そうな担任の様子でしたが，回を重ねていく度に笑顔での会話が多く見られるようになっています。それは，どうしてなのか振り返ってみると，会話の聞き手が毎日一緒に生活している子どもたちだからだと思います。子どもたちは，担任がＡＬＴやＪＴＥと話している姿をとても楽しそうに見つめます。そして，その時の子どもたちの表情や眼差しが担任の緊張感や不安をなくしてくれるのです。また，子どもたちは担任の先生の話す言葉だからこそよく聞いて理解し，自分も英語で話してみたいのだと思います。

高郷小学校では，これからも子どもと共に楽しむ外国語教育の授業づくりを進めていきたいと思います。

各学校の特色ある取組紹介　北塩原村立第一中学校

考え，議論する道徳を通して道徳的判断力を高める生徒の育成

本校では，昨年度より２年間，本テーマで研究に取り組んできました。

今年度は，昨年度の成果を踏まえ，生徒の「道徳的判断力」を高めるために，

（１）考え，議論する道徳の授業
（２）変容を捉え，良さを認め伸ばす評価

の二つの視点で，実践研究を行いました。

（１）については，
①物事を多面的・多角的に考えさせること
②学習形態を工夫しながら議論させること
③自分の問題として考えさせること

（２）については，
①授業の中の「学習活動」における評価
②大くくりなまとまりを踏まえての評価

に，焦点をあてて研究を進めてきました。

実践にあたっては，４回の要請訪問を含め，全教員が検証授業を行い，視点に迫りました。

また，11月12日には，会津教育事務所指導主事，村教育長様をはじめ，多数の参観者を迎えて，「道徳科授業研究公開」を開催しました。研究の視点を踏まえた三つの公開授業の後の分科会では，議論のさせ方をはじめ資料の活用の仕方や発問のあり方，効果的な板書などについて積極的な意見交換が行われました。全体会では，指導助言の先生方より，道徳科の指導と評価について，今後の取り組み方のご指導をいただくことができました。

結びに，２年間の研究を通して，ご多用の中，本校研究のために，ご指導やご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

各学校の特色ある取組紹介　昭和村立昭和小学校

児童が主体的に学ぶ複式学級

昭和小学校も，少子化の流れの中で完全複式学級となり，それに伴い学習指導において多くの課題と困難に直面しています。そうした課題や困難を抱えつつも，本校では個に応じた指導を図る上での大きなチャンスと捉え，実践研究を深めています。昭和小学校は，次の三つの学びを大切にして，学習指導を行っています。

1　教材との出合いを大切にした主体的な学び

子どもたちにとって教材との出合いは大切です。「～について見たい，聞きたい，知りたい」と願うことが，学びの原動力になります。教材との出合いの充実によって，物事に真剣に取り組む態度も育むことができます。

また，教員の側から見ても，教材研究は教材の価値について考える絶好の機会になっています。

2　多様な言語活動による主体的な学び

思考力・判断力・表現力を育むためには言語活動の充実が欠かせません。「単元のどの段階に言語活動を位置付けるのか，個の学びの充実にはどのような言語活動がよいのか」

１，２の学びについては，小規模市町村教育委員会対応指導主事訪問を要請し，年４回の授業研究会によって研究を深めています。

3　地域との協働による主体的な学び

地域が学校を創る，学校が地域を創るという視点で考えたとき，地域協働の学びはとても大切です。地域人材を活用した杉の子会活動，自然教室，収穫祭等の行事を中心とした日々の活動の中で，主体的に学ぶ姿勢を育んでいます。

各学校の特色ある取組紹介　会津美里町立新鶴中学校

子どもたちが元気に！　地域も元気に！
「社会に開かれた学校づくり」

始動！「新鶴絆太鼓」への挑戦

新鶴中学校の１年生３５名で昨年６月に結成された「新鶴絆太鼓」は，昨年１０月に同校で開かれた文化祭「飛鶴祭」で，初めての演奏を披露しました。子どもたちの一体感のある力強い太鼓演奏は，子どもたち自身をはじめ，保護者や地域の方々に大きな感動をもたらしました。

「新鶴絆太鼓」挑戦の取組は，郷土を愛する心の育成や学年集団の一体感の高揚等を目的に始まりました。「新鶴絆太鼓」の取組には，子どもたちの未来に向けた明確な構想があります。

◆期待される生徒の姿（10年後・20年後の生徒の姿）

- **Step1**　現在学校生活を送っている仲間たちとの関係をよりよいものに高める。
- **Step2**　新鶴中学校卒業後も，在学中に体験したことを振りかえる。
- **Step3**　結婚式やお祝いの席など，何らかの機会を利用して太鼓を披露する。
- **Step4**　地域の行事などで習得した技能を次の世代につないでいく。

※新鶴中の生徒たちは，「新鶴絆太鼓」の体験をきっと忘れることはない

↓

**学校で学んだことが，
明日，そして将来につながるように・・・**

また，「新鶴絆太鼓」の取組にあたっては家庭や地域との様々な連携が見られました。

◆「新鶴絆太鼓」の取組における家庭，地域との連携（主なもの）

家庭（ＰＴＡ・後援会）との連携

- 法被作製の協力
- 文化祭での太鼓運搬協力

地域・関係機関との連携

- 和太鼓使用と練習場所の提供（新鶴生涯学習センター）
- 和太鼓指導者の紹介（新鶴生涯学習センター）
- 「新鶴絆太鼓」演奏発表のポスター・チラシ配布の協力（区長会）

「新鶴絆太鼓」の取組を通して，子どもたちは達成感を味わい，学年集団の仲間意識の高まりなど，大きな成長が見られました。今後は，全校生に取組を広げ，地域行事への参加等，地域との連携・協働をより一層進めていくとのことです。「新鶴絆太鼓」の進化，そして，新鶴中学校の挑戦は続きます！

【「新鶴絆太鼓」に挑戦した新鶴中学校１年生の子どもたち】

講師募集!!

**令和２年度に会津域内の公立小・中学校で勤務できる講師・養護助教諭・栄養職員・事務職員を募集しています。
なお，採用区分が臨時的任用職員，任期付教職員，会計年度任用職員（非常勤職員）になりました。
詳しくは，会津教育事務所のＨＰをご覧ください。**

http://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/70410a/

第41回少年の主張全国大会

奨励賞 受賞作品紹介

「手話から広がる世界」

喜多方市立高郷中学校３年
石山心南（いしやま みなみ）

弟は，私が小学校二年生のときに生まれた。世話好きの私はとても嬉しくて，保育園の先生のように面倒を見たり，一緒に遊んだりした。

ある日，弟の耳に何かが付けられた。母に尋ねると，それは「補聴器」といって，啓心は耳が聞こえにくいから，私たちの声がよく聞こえるようにそれを付けるのだと，優しく教えてくれた。正直，私はショックだった。けれど，私がくよくよしても何も変わらない。大好きな弟の力になるため，私は自分にできることを探し始めた。

色々な人から情報をもらい，私たち家族は「手話」に出会った。手話は，耳が聞こえない人が会話をするときに，なくてはならないものだ。手話を学び始めた頃，弟が通う聴覚支援学校の運動会に参加したことがある。手話だけで会話している人たちを見て，私はとても驚いた。私が言葉を話すように，手話を駆使して話の内容を理解したり，自分の考えを伝えたりしている。このとき私は決心した。私も手話をもっともっと上達させて，弟と会話をする。そして，弟だけでなく，色々な人と，手話で会話をしてみようと。

私たち家族は，弟の小学校入学を機に，全員で手話サークルに通うことにした。そこで学ぶことはとても多い。例えば，手話は身ぶり手ぶりだけでなく，表情も大切であること。声は，イントネーションやアクセントを使って気持ちを表すことができる。しかし，手話にはそれができない。その分，様々な感情を表情で表すことが大切なのだ。また，手話サークルに参加している方々とのやり取りも，私に大きな影響を与えている。サークルの皆さんは雄弁だ。明るくフレンドリーで，手話の世界に飛び込んだ私たちを温かく受け入れ，優しく手話を教えてくださる。初めは，どんな雰囲気なのか，どう接すればいいのか不安もあったが，今ではコミュニケーションを楽しむ自分がいる。手話が少しずつ上達して，会話が増えるのが嬉しいし，自分の世界が広がっていくように感じるからだ。

もちろん，まだ弟との間にすれ違いはある。最近も，うまくコミュニケーションが取れないことにイライラし，お互いに辛い思いをした。弟は発音が不明瞭なため，言葉が相手に伝わりにくいと分かっているはずなのに，気持ちを理解してあげられなかった。一番大切なのは，お互いを思いやる気持ちに違いない。しかし，手話が上達すれば，私は弟の伝えたいことを理解してあげられるし，弟も自分が伝えたいことを私に伝えられるようになり，すれ違いは減るだろう。

手話は，本当に素晴らしい。自分の思いを伝える術は，声だけじゃない。たとえ声が出なくても，耳が聞こえなくても，相手と話すことができる。手話を自由自在に使える自分になれたら，私にはどんなことができるだろうか。思いが膨らんだ。

私は去年，あるＣＭを見て体に衝撃が走った。画面に映ったのは，難病の子どもを救う看護師の姿だ。それから調べるうちに，医療にも様々な職種があり，医師や看護師，薬剤師，臨床工学技士など，たくさんの人が関わって，一人の人間を救っていることに気づいた。私も，その一員になりたい。私の中に，強い思いが湧き起こった。

私が目指すのは，手話ができる看護師だ。耳の不自由さは外から見て分かりにくく，困っていても，まわりに助けを求めにくい。ましてや病気になったとき，自分の体の状態がうまく伝わらなかったら，その不安や辛さはどれほどだろう。私は，そういう患者さんの心に少しでも寄り添い，力になりたいのだ。

手話の素晴らしさや可能性を知った私にできることはたくさんある。手話を使ってたくさんの人を救う将来の自分を心に描きながら，今日も私は練習する。